

この世を生きる念仏の教え

一楽 真

目
次

■ 「ようお照らしがありましたて」	1
■ 念仏の教えは「濁世の目足」	3
■ 仏さまに眼をいたたくと	6
■ 教えを聞いてきたはずなのに	9
■ 現実を歩む勇気をいたたく	12
■ 後の世に教えを伝える	15
■ 浄土とはどんな世界か	19
■ 信じ込むことが信心ではない	26
■ 煩悩に振り回されずに生きる	32
■ なぜ信心決定しないのか	36
■ 信心の溝をさらえよ	40

■ 二河白道の譬え	45
■ 勧めてくださる人との出会い	52
■ ダイヤモンドのような信心とは	57
■ 十方無量の諸仏にはげまされ	62
■ あとがき	70

■「ようお照らしがありがとうございました」

数年前のお正月のこと。故郷である石川県の寺に私が帰省したというので、「これで鍋でも食べまっし」とご門徒のおばあちゃんが野菜を持ってきてくれました。白菜と大根です。とても大きな白菜だったものですから、私は思わず「わあ、みごとな白菜ですな！」と言いました。

実はそのとき、私は心の中で、「こんな白菜、スーパーで買ったらいくらするだろう」と思ったのです。都会に住んでいる私にとって、野菜とはスーパーでお金を払って買うものですから、そのときもそういう根性が動いたわけです。

そうしたら、おばあちゃんから返ってきたのはこういう一言でした。「はい。今年はようお照らしがありがとうございました」。お照らしというのは、太陽

が照ってくださったという意味です。びつくりしました。

「私が頑張がんばって育てましたから」とか、「肥こやしをたくさんあげましたから」というのではないのです。太陽が照ってくださったからこんな白菜になりました。雨が降って、大地がはぐくんでくださったからこんな白菜になりました。そうおっしゃるわけです。私は、自分の根性の浅はかさ
を思い知らされ、頭たまを叩かれたような気がしました。

同じ白菜を目の前にしていながら、私とおばあちゃんとは見ている世界が全然違うわけです。私が見ていたのは「これなんぼや」という世界です。それに対しておばあちゃんは、いろいろなものに支えられて、お天道さまや大地のおかげでこんな白菜になりました、という世界を見ておられる。同じものを見ていても、全然違う世界を生きているという

ことがあるのです。

■念仏の教えは「濁世の目足」

「お浄土はどこにあるのですか？」と聞かれると、私は「それはどこか遠くにある場所ではないでしょう」と答えます。それは今言ったような話があったからです。今ここにいても、どういまなこう眼まなこでもものを見るかによって、世界が大きく変わってくるからです。

お金を中心に見れば、売れるか売れないか、得か損かという世界しか見えませんね。そんな眼では、下手をすると自分の子どもまで「この子はようけ稼かせいでくれるかもしれん」と見るかもしれません。「せつかく育てたのに、この子はぜんぜんお金を稼いでくれん」と不満をもら

すかもしれません。そんなことでいいのでしょうか？

お浄土というのは、どこか遠い場所にあるのではないのです。浄土の教えを通して、仏さまが照らし出すいのちを見せていただくと、白菜ひとつ目の前にしても、それを見る眼が変わるのです。自分の子どもをどう見るか、まわりの人をどう見るかが大きく変わってくるのです。

親鸞聖人は、浄土の教えが今の自分の生き方に大きくかわるといふことを大事にされました。お浄土はお棺かんに入ってから話ではないのです。そうではなくて、どこに帰るかが決まれば、自分は何を大事にして生きるのか、今の生き方が変わるのです。ものごとをどう見るかといふ、ものの見方が変わるのです。これが、教えをいただくところに開かれてくる新しい世界なのです。

親鸞聖人は、いつも私たちがお勤つとめする『正信偈』のほかに、「西方さいほう不可思議尊ふか思議尊」というお言葉から始まる『念仏正信偈』ねんぶつ（文類偈）をつくっておられます。その中で念仏の教えを「濁世の目足じよくせ」（真宗聖典四一三頁）と押さえてくださっています。

「濁世」というのは「濁った世の中」ということです。濁っているということは、ものがはつきり見えないということですね。そういう現実の世の中を生きていく中で、「この念仏の教えは、私たちの目であり、足である」と教えてくださったのです。ですから、今生きているうえで大切な教えなのです。決して死んでからの話ではありません。

■ 仏さまに眼をいただく

白菜ぐらいなら笑い話でもすむかもしれませんが、私たちは人を見る
ときにも、どうでしょう。例えば、中東の出来事をニュースで見ている
も、日本に住んでいる私たちにはどうしてもアメリカ発信のニュースが
入ってきます。それを通してアラブの人は怖いとか、イスラム教徒は怖
いといったレッテルで決めつけるならば、これが実は非常に恐ろしいこ
となのです。

これを、仏さまの眼から見たらどうなるでしょうか。仏さまはたぶん
こうおっしゃると思います。「戦争には勝ったものと負けたものがある
のではない。勝つても負けても、戦争は痛ましい」と。これが仏さまの
眼だと思えます。誰しもが平和を願い、安らかに生きていくことを願

ながら、なぜ殺し合いを繰り返すのか。そのことを痛ましいとご覧にな
るのが仏さまだと思います。

敵と味方が生きているわけではありません。誰もが自分の人生を大事に
したいと思つて生きているのです。しかし人間のものの見方を見ると、
アラブの人を敵と見たり、イスラム教徒は怖いと勝手に偏見をもつたり
する。これがなかなか厄介やっかいなのです。

外国の話だけではありません。私たちは敵と味方に分かれて争うとい
うことを、身内でもやるわけでしょう。それこそ親子・兄弟姉妹で争う
ことも起きます。

このあいだもうちの近くであったのですが、あるおばあちゃんが亡く
なられて、お葬式を出したまではよかったです、そのおばあちゃん